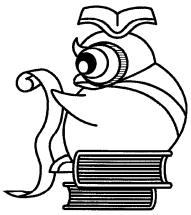
ぱぴるす
聖学院大学総合図書館報
第48号（2009年春）
祝卒業・
新入生歓迎号



図書館あれこれ

鵜沼　裕子

長年、書物と縁の深い生活をしてきて瞠目させられるのは、情報収集機能の変貌ぶりである。

私が学生であった約半世紀前は、コピー機能さえほとんど無いに等しかった。借りたノートも手書きで写すので、“真面目”な女子学生のノートは試験期になると人から人へと泳いでいってしまい、肝腎の持ち主が試験を受けられなかった、という笑えない思い出もある。本の入手自体がなかなか困難であったので、大学院生時代に研究資料を求めて京都の同志社大学に行き（まだ新幹線もなかったころの話である）、1頁ずつ写真を撮り、現像したものを辛うじて判読したこともあった。

一足飛びに聖学院時代の話になるが、大学創立から数年後のこと、蔵書検索方式を、カードから徐々にPCに移行しようという話が初めて教授会に出たとき、一老教授が延々と大反対演説をされ、図書委員長として提議した私が立ち往生してしまった場面もあった。かつてカードボックスが占めていたスペースが今は読書の場となり、周囲に置かれたPCを学生たちが自在に操っている光景をみると、まさに隔世の感がある。私自身の最近の経験を一つご披露しよう。他大学の先生方との共同研究の成果を本にすることになり、代表者の先生から、電子媒体で発表したいが、という知らせがあった。書物世代の私は大いに驚いて、それはかまわないが、ぜひ書物にもして下さい、と懇願した。本でないと読んでもらえないだろう、と思ったのである。ところがこの話を図書館でしたところ、「先生、今は書物よりも電子媒体の方がずっとアクセスが多いんです」と聞かされ、図書館長の身でありながら…、と自分の不明を大いに恥じ入ったのであった。

電子化された図書館資料の利用については、「ぱぴるす」第47号に河島茂生先生が書いておられるが、インターネットをいかに使いこなして情報を集めるかが、よい研究成果をあげる重要な鍵となる時代である。学生の皆さんは、瞬時に得られる厖大な情報を駆使し、そこで浮いた時間や労力を勉学に振り向けて、よい研究成果につなげてほしいと切に願っている。

こうした推移をみると、重くて場所をとる書物などというものは、いずれ不要になる時が来るのではないか、という気がしてくる。ところが最近、情報技術の最先端で仕事をしておられる方々の中に、いわゆる古版本や初版本、古書などに関心を寄せる方が意外に多い、ということに気がついた。現在、私のもとで博士論文を作成中のKさんは、全国の大学図書館の中でも有数の最先端設備で知られるK大学図書館の司書をしており、情報学関係の研究で修士号を取得された方だが、一方でヨーロッパの印刷技術の黎明期に並々ならぬ関心を抱いており、16世紀の印刷業者・出版者として名を残しているC. プランタンという人物の記念館を、同好の士たちとベルギーのアントワープに訪ねたりするほどの熱の入れようである。

私自身はどちらかと言えば、特に専門分野に関しては、「本は内容がわかればよい」と考える方なのだが、子どものころや青春時代に手にした本にはやはり特別な思い入れがある。私の書棚の片隅には、昭和初期に出版された、ボロボロの分厚い『グリム童話集』や、「キンダー・ブック」、「講談社の絵本」、敗戦直後の少女雑誌や少女小説の復刻本などがそっと置いてある。また大学図書館4F閲覧室の一隅には、（多くは復刻本であるが）夏目漱石、芥川龍之介、堀辰雄などの著作の古い版が置かれていて、その感触は私を、それらを初めて手にした若い日へといざなってくれる。

そもそも本誌の題名「ぱぴるす」とは、古代エジプトで文書を記すために草から作られた紙のことである。実に図書館は、時空を超えた世界へと人々を運んでくれる「魔法の建物」と言うべきではなかろうか。

（図書館長　アメリカ･ヨーロッパ文化学研究科　教授）